

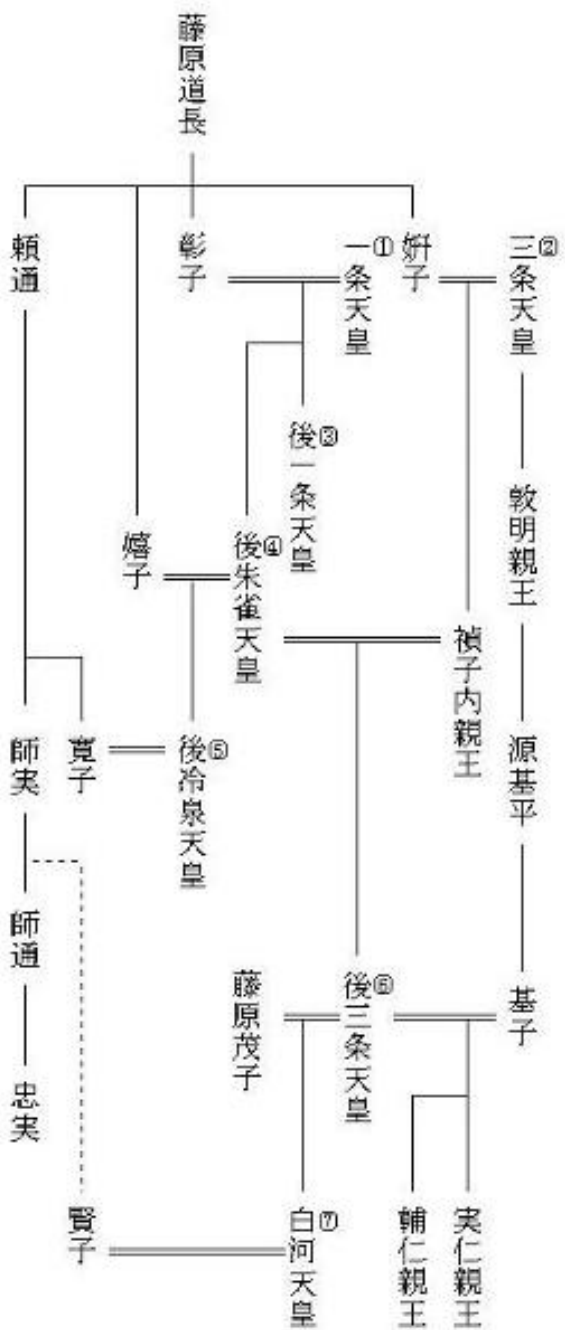
第二節 院政と鈴鹿郡

第一項 院政の時代

院政のはじまり 院政は、天皇の直系尊属(父方の曾祖父・祖父・父)にあたる退位後の天皇が、朝廷の重事決定を大きく左右する政治形態である。応徳三年(一〇八六)十一月の白河天皇しらかわから善仁親王たるひと(堀河天皇ほりかわ)への譲位に始まり、室町幕府三代将軍足利義満あしかがよしみつの登場で実質を失うも、形式的には江戸時代まで存続した。このうち白河天皇の譲位から鎌倉幕府の成立までの時期を、院政期という。院政期をややさかのぼる時期から説きおこそう。

治暦四年(一〇六八)四月、後冷泉天皇ごれいぜいが没し、後三条天皇ごさんじょうが即位する。後三条の母は、三条天皇の皇女禎子内親王ていし(陽明門院もんいん)。後二条は、藤原氏摂関家を外戚とせぬ、約百七十年ぶりの天皇であった。摂関家が天皇の外戚として朝廷の重事決定を握る摂関政治は、ここに終わる(図55)。

図55 後三条天皇関係図 数字は即位順、点線は養子



治暦五年(一〇六九)二月、後三条は、寛徳二年(一〇四五)以後の新立荘園や、設立に際しての証拠文書をもたぬ荘園の停止を発令(延久の荘園整理令)。延久四年(一〇七二)九月には、それまで区々だった度量衡(長さ・体積・重量の基準)を統一し、

二月、後三条は、にわかにかに二〇歳の皇子貞仁親王（白河天皇）に譲位する。だが、白河の即位に際して皇太弟となったのは、三歳の異母弟実仁親王。白河は、実仁が即位するまでの中継ぎ天皇であった。

この間、後二条が院政をおこなったか否かについては、古来、論争があるけれども、延久五年（一〇七三）五月、後三条は没する。依然、皇太弟は実仁で、白河の中継ぎとしての立場は変わらない。ところが、応徳二年（一〇八五）十一月、実仁が一六歳で急死する。

そして、実仁の同母弟輔仁親王を推す勢力との駆け引きのなか、応徳三年（一〇八六）十一月、白河は皇子善仁親王（堀河天皇）を皇太子にすえ、即日、譲位という荒技をやつてのける。ここに、いわゆる白河院政が始まる。白河は「天下三不如意」や「雨水の禁獄」の逸話で知られるような、専制君主への道を歩みはじめるのである。そうした白河院政が本格化するのには、成人した堀河天皇が没し、堀河の皇子鳥羽天皇が五歳で即位する嘉承二年（一一〇七）七月、十二世紀の初頭以降のことであった。

大規模立荘の時代 荘園を設立する手続きを立荘という。十

二世紀という時代を特徴づけるのは、大規模な立荘の盛行である。もとより、九世紀以前にも墾田を中核とする古代荘園（初期荘園）があり、十〜十一世紀にも、公家や大寺社など中央の頭貴が特定の耕地や人々を支配する荘園（免田・寄人型荘園）が存在した。だが、初期荘園は早くに廃れ、免田・寄人型荘園も、荘園整理令や国司の交替で停廃される不安定なものであった。

ところが、十二世紀になると、生活の拠点たる村落を中核に、生活物資の供給地たる田畠や山野河海を領域的に包摂する大規模な荘園が、天皇家や摂関家の命令で設立されるようになる。これを領域型荘園という。領域型荘園設立の盛行は、単なる大規模私有地の展開ではない。十二世紀の大規模立荘は、なかば

公的な国家的給付にほかならず、すでに破綻した古代律令体制的な国家財政を、中世的なそれへと転換する政策の一環であった。

領域型荘園の大規模立荘は、白河院の孫である鳥羽院が院政を開始する大治四年(一一二九)七月以降の、いわゆる鳥羽院政期を最盛期とする。亀山市域で設立の経緯が分かるのは、次項でとりあげる保延元年(一一三五)八月成立の和田荘(亀山市和田町)のみである。とはいえ、市域の荘園の大部分は、鳥羽院政期以降に設立されたものとみられる。

第二項 伊勢平氏と鈴鹿郡

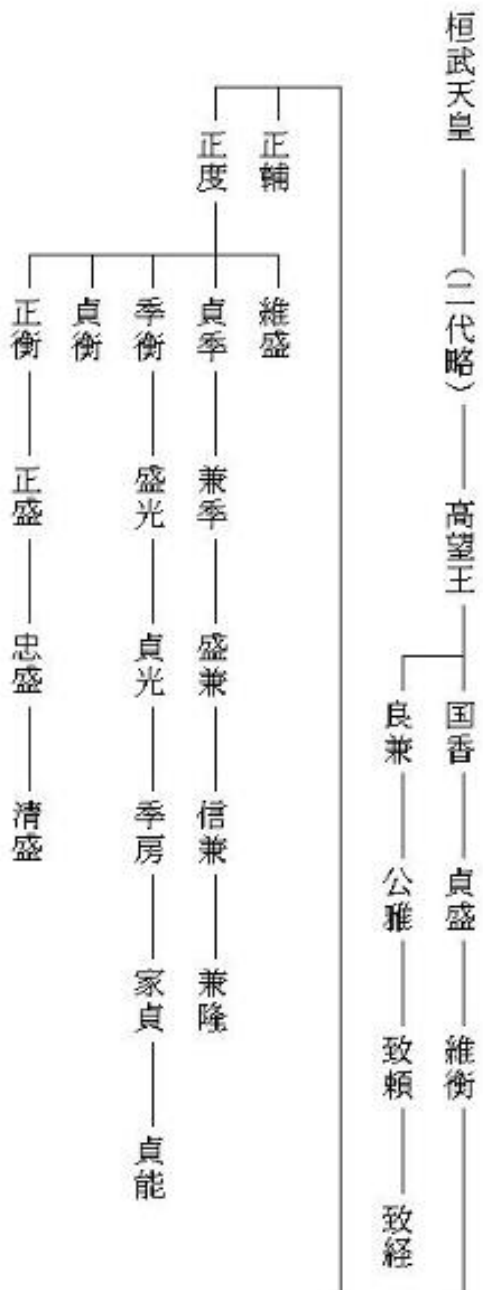
伊勢平氏の雌伏と雄飛

桓武天皇を祖とし、十二世紀後半までに

平清盛を輩出した一族を伊勢平氏という(図56)。この一族が伊勢国に勢力を扶植していたことが確認できるのは、十世紀の末、平維衡以降のことである。維衡は、都では本宅と五位の位階をもち、諸国では各国の長官たる受領の地位を渡り歩き、私的にも荘家(荘園)を経営するなど富裕を誇った。長徳二年(九九六)ごろ、維衡が右大臣藤原顕光の邸宅である堀河院を修造したのは、維衡の財力の片鱗にすぎぬ。

長徳四年(九九八)の末、平維衡は伊勢国で同族の平致頼と合戦に及び、致頼は隠岐国(島根県)へ流され、維衡は身分をそのままに淡路国(兵庫県)へ身柄を移される。このとき維衡の地位

図 56 伊勢平氏略系図



は、前下野守さきのしもつけのかみであった。

ほどなく許された維衡は、寛弘三年（二〇〇六）正月、藤原顕光の引き立てで、念願の伊勢守いせのかみに就任。しかし、同年三月、左大臣藤原道長みちながは、維衡を解任する。維衡が伊勢国に「事ある者」（訳ありの人物）であることが、その理由であった。

そして、寛弘三年（二〇〇六）六月、平維衡は上野介こうずけのすけに就任。その後、維衡は藤原道長や大納言藤原実資さねすけとも主従関係をむすぶ。

なお、長元四年（二〇三二）九月、維衡は、伊勢神宮へ公卿勅使くぎようちよくしとして派遣された参議みなものつねより源経頼みなもとつねよりに対し、路次の鈴鹿駅で牛二頭を贈ろうとし、断られている。また、これにさきだつ長元三年（二〇三〇）末には、維衡の長男とみられる正輔まさすけが、平致頼の子致経むねつねと伊勢国で合戦している。維衡と致頼の争いは、次代の正輔と致経へとうけつがれ、やがて維衡流が致頼流を駆逐していくことになる。

その後、いつしか平正輔は姿を消し、維衡流の嫡流は、弟の正度まひのりへ移る。正度については、寛仁三年（一〇一九）の伊勢神宮の遷宮に際して造宮使に任じられたことや（史610）、伊勢国木造まきつくり荘（津市木造町）を入手したこと、常陸介ひたちのすけ・出羽守でわのかみなどを歴任し、最終官が越前守えちぜんのかみであったことなどが判明するのみである。正度には、維盛これもり・貞季さだすえ・季衡すえひら・貞衡さだひら・正衡まさひらの、少なくとも五子がいた。

このなかには、たとえば、延久六年（一〇七四）六月、維盛が公卿勅使の源経信に鈴鹿駅での供応を申し出、寛治四年（一〇九〇）十一月、貞季が公卿勅使の源雅実まさむねへ一志駅に設けた館の材木等を提供するなど、伊勢国内での活動が散見する者もいる。とはいえ、前代の維衡や正度のごとく、受領を歴任した者はおらず、伊勢平氏は、こののちしばらく雌伏の時代を過ごすことになる。その雄飛は、正衡の子正盛まさもりが白河院の近臣として活躍する十一世紀の末、院政期の初頭まで待たねばならぬ。

平正盛についても、彼の前半生に関する史料は少ない。寛治

四〇六年（一〇九〇）九二〇ころ、加賀守藤原為房に檢非違所（警察追捕にあたる役職）として仕え、寛治七〇康和三年（一一九四）一〇二〇ころ、播磨守藤原頭季から厩別当（馬関係を統括する役職）に任じられたという逸話が残るにとどまる（延慶本『平家物語』）。

そうして諸国をめぐり、富や所領を集積した平正盛は、永長二年（一〇九七）、伊賀国韮田・山田村（伊賀市上・中・下友田付近）を、京都の六条院に寄進し、歴史の表舞台に登場する。六条院は、白河院の愛娘であつた故郁芳門院こと媿子内親王の供養堂である。

このころから、正盛はしだいに白河院に接近し、院を警固する北面の武士を務め、また、隠岐守・讃岐守などを歴任。嘉承三年（一一〇八）正月には、源義家の嫡子で、ときに朝敵となつていた源義親を出雲国（島根県）で討ち取り、第一国の長官たる但馬守に任じられる。子の忠盛、孫の清盛と、伊勢平氏が雄飛するための基礎は、かくて築かれていく。

鈴鹿山の抜丸 伊勢国に基盤をもち、京都で活躍した伊勢平氏は、両所をむすぶ要所たる鈴鹿山周辺とも深い縁をもつていた。『平家物語』の異本『源平盛衰記』にみえる逸話をみよう（史353）。

今は昔、鈴鹿山のほとりに貧しい男が住んでいた。伊勢神宮



写真100 三子山（関町坂下）

への崇敬を怠らぬ男に、天照大神は「山で狩猟して妻子を養え」と告げる。信心深い男は、山へ入り、しばらくして「三子塚」というところで「奇しき太刀」を拾う。この太刀を手にしてから、獣や鳥を取り逃がすことのなくなった男は、これぞ神のご加護と感じ入る。

「三子塚」は、鈴鹿峠の東方の峰、三子山みつごやまにあつた塚である。三子山は、延長五年(九二七)撰進の『延喜式』にみえる片山かたやま神社(関町坂下)の神体山で、旧社地。江戸時代には、山頂で雨乞い神事がおこなわれた霊山である(写真100)。

ある日、男は、山中の大木の下で夜を明かす。太刀は、大木の幹に立てかけておいた。朝になり、男は、大木が枯れていることに気づく。「これ、定めて神剣ならん」。男は、太刀を「木枯こがらし」と名づけた。

やがて、ときの伊勢守平忠盛が噂を聞きつける。一見して「我が朝ちよう(日本国)には有りがたき剣なり」と感嘆した忠盛は、栗真くりまのしやう荘(津市栗真)の年貢三〇〇〇石を対価に「木枯」を手に入れる。男は、伊勢神宮のご利益りやくと感謝し、ますます豊かに過ごしたという。

京都の六波羅(京都市東山区)に帰った忠盛は、ある日、池いけどの殿山荘で昼寝をしていた。前後不覚に寝入っている。「木枯」は、枕元に立てて置いてあった。——すると、突然、庭の池から大蛇が這い出て、忠盛を一呑みに、呑もうとする。忠盛は、気づかぬ。そのとき「木枯」が、物音を立てて倒れる。音に気づき、目を覚ました忠盛は、目撃する。「木枯」が、みずから鞞さやより抜け、大蛇に刃を向けて威嚇しているのを。

このできごとがあつて、忠盛は「木枯」の名を「抜丸ぬけまる」と改め、これを清盛の異母弟頼盛よりもりに与えたという。頼盛が「抜丸」を相伝したことが、清盛・頼盛兄弟の不和の原因と、『源平盛衰記』は記している。逐一の真偽はさておき、伊勢平氏と鈴鹿山周辺の関係の深さを物語る逸話である。

和田荘の立荘 平忠盛は、伊勢国内の各地に私領を集積していた。忠盛が活躍したのは鳥羽院政期、すなわち大規模立荘の最盛期である。そして、この時期、忠盛が関与して立荘された地域の荘園に、和田わだのしやう荘(亀山市和田町)がある。立荘の状況を語るのには、二百年以上ものち、南北朝時代の史料である(史59)。

和田荘のもとになったのは、平忠盛が有した所領である。前

述の父正盛が六条院に寄進した伊賀国韮田・山田村の私領や、後述する弟忠正ただまさの所領のありかたからみて、忠盛の所領も一円的な領域をもつ形態ではなく、散在する私領の集合体であったとみられる。そして、その内容は「手次文書てつぎもんじよ」とよばれる土地所有を示す権利書に記録されていた。「手次文書」は、所領の売買や相続に際し、新旧の権利書を貼り継いで作成される。忠盛が新たに買得した所領とともに、父正盛から相続した私領もふくまれていたかもしれない。

そして、のちに藤原為隆ためたかという有力な貴族が、平忠盛から「手次文書」を入手する。ここで想起されるのが、為隆の父為房である。忠盛の父正盛が若いころ、加賀守であった為房に検非違所として仕えたことは、さきに述べた。藤原為房・為隆父子は、摂関期には低迷するも、院政期に院の近臣として活躍した、勸修寺流藤原氏の出身である。藤原為房と平正盛、藤原為隆と平忠盛の関係が、みごとに相似形をなすことに注意したい。

下って大治五年(一一三〇)九月八日、藤原為隆が数カ月の闘病の末、六一歳で没する(『中右記』同日条)。これにさきだつ同月四日、朝廷は伊勢国司の申請をうけ、藤原為隆の伊勢国内の荘園を停廃している(史³⁴⁶)。荘園名は不明ながら、さきに平忠盛から入手した所領であろう。このころ、為隆の息光房みつふさは二歳。官職は中宮権大進ごんのだいじょう、位階は従五位上にとどまる(『中右記』同年五月十五日条)。為隆の病と、光房の若年につけ込み、荘園は停廃されたのである。

そうしたなか、保延元年(一一三五)八月十一日、藤原光房は、伊勢国司による没収から逃れるため、みずからが荘園経営に携わる預所あずかりどころの地位にとどまるのと引き換えに、所領からの年貢を子々孫々まで上納することを条件に、父からうけついで所領を、崇徳天皇の中宮藤原聖子せいし(皇嘉門院)に寄進する。藤原聖子は、ときの関白藤原忠通ただみちの娘である。光房が、長らく中宮少進しょうじょう・大進として聖子に仕えたことも、寄進の機縁となった。

そして、保延元年(一一三五)八月十六日、藤原忠通は、立荘

を命じる政所^{まんどころくたしづみ}下文を発給。かくて平忠盛の集積した散在所領が、藤原為隆・光房父子の手を経て、撰関家と結びつくことで、皇嘉門院を本家^{ほんけ}として仰ぎ、勸修寺流藤原氏が預所として経営にあたる和田荘が成立するのである（図57）。

近年、院政期の立荘をめぐる研究が急速に進んだ。とくに、天皇家や撰関家による立荘は、零細な私領がそのまま荘園へ転化するわけではなく、所領内部の量や質の構造的な変化をともなうものであったことが指摘されている。たとえば、当初、十数町の田地にすぎなかった私領が、院による立荘を経て、田地数百町と山野数千町をふくみこむ荘園へと転化した事例などが知られる。前項で述べた、生活の拠点たる村落を中核に、生活物資の供給地たる田畠や山野河海を領域的に包摂する領域型荘園の誕生である。

図57 諸家略系図

【伊勢平氏】



【勸修寺流藤原氏】



【天皇家】



【撰関家藤原氏】



和田莊のもととなった平忠盛の私領が、おそらく散在する小規模な所領の集まりだったことは、前述したとおりである。和田莊の場合も、摂関家領として成立した以上、忠盛の私領を大幅にこえる、一定のまとまった規模をもつ荘園だったと想定しうる。それを明確に示す史料は現存しないけれども、和田莊は、現在の亀山市和田町付近にとどまらず、鈴鹿川北岸から北西の河岸段丘上にかけて立地した領域型荘園だったと考えてよいだろう。

保元の乱と鈴鹿関 鳥羽院政下の永治元年（一一四二）十二月、父鳥羽院の意向により、崇徳天皇は、異母弟で養子の近衛天皇に譲位する。この即位に際して作成された宣命（天皇の命令書）に、本来は「皇太子」とあるべきところ、鳥羽院の詐略により「皇太弟」と記されたことは、つとに有名である。

院政の資格者は、天皇の曾祖父・祖父・父といった直系尊属に限られる。将来、崇徳院が子孫を天皇にすえ、院政を執る可能性は、限りなく遠のいた。鳥羽院の詐術の背景には、崇徳院の母藤原璋子（待賢門院）と、鳥羽院の祖父白河院の密通の噂や、その結果、生まれたのが崇徳院だという疑惑があった。

その後、久寿二年（一一五五）七月に近衛天皇が没すると、帝位に即いたのは崇徳院の同母弟後白河天皇であった。近衛の母美福門院こと藤原得子は、後白河の息守仁親王（二条天皇）を養子としており、要するに、後白河は守仁が即位するまでの中継ぎ天皇だった。約七十前に院政を始めた白河院も、約百八十年後に建武新政を実現する後醍醐天皇も、中継ぎ天皇である。中継ぎ天皇の時代には、何かがおこる。

保元元年（一一五六）七月二日、鳥羽院が没する。皇位をめぐる崇徳院の不満に、摂関家内の主導権争いが結びつき、京都とその周辺の軍事的緊張は、極度に高まった。そして、ついに七月十一日未明、崇徳院と後白河天皇の両陣営間で、大規模な軍事衝突がおこる。保元の乱である（史³⁵⁷）。

天皇方の武士は、河内源氏の源義朝・義康、摂津源氏の源頼

政、美濃源氏の源光保、伊勢平氏の平清盛・信兼ら。対する上皇方は、河内源氏の源為義・為朝父子、伊勢平氏の平忠正・正弘らである。摂関家以下、源氏・平氏などの各一族が、敵味方に分かれて合戦に及んだ。

後白河天皇の兄である崇徳院は、皇位を左右しうる立場になく、現に後白河が皇位にある以上、正当性は天皇方にある。実際、天皇方には関白藤原忠通を始め、各一門の主流が与同し、上皇方は、崇徳院や摂関家の藤原忠実・頼長父子との個人的な関係で動員された反主流の軍勢にすぎぬ。天皇方の勝利は、自然のなりゆきであった。

『保元物語』によると、上皇御所の陥落後、賊将となった源為義は東国への逃亡を企てたものの、鈴鹿関と不破関(岐阜県不破郡関ヶ原町)が封鎖されていたため、降参したという(史360)。当時、鈴鹿関に関所としての実体があったかはともかく、この事実は、鈴鹿関が依然、軍事的な要地であったことを示している。

平忠正の所領 保元の乱の余波は、亀山市域にも及んだ。なかでも注目されるのは、天皇方に没収され、後院領(天皇退位後の御所に附属する所領)に編入された、上皇方の平忠正の所領である(史361)。史料には「鈴鹿・川曲〔河〕両郡散在田畠、二所太神宮領伍拾壱町を除くの外、」とある。鈴鹿郡は亀山市域と鈴鹿市西部にあたり、後述するように、忠正の所領は、亀山市域にも点在していた。伊勢神宮領五一町とは、神宮を上級領主とし、そのもとで忠正が管理・支配していた所領であろう(一町は一〇八〜九m四方)。忠正の所領全体は、それらをこえる規模で二郡にまたがり、展開していた。

『保元物語』によれば、平忠正は、乱での敗北後、伊勢国を目指して逃亡したという。忠正の基盤が、市域一帯にあったからであろう。そして、鎌倉時代の初期、忠正の旧領は、後院領の葉若・井尻・安楽村などの名前で史料上にあらわれる(第六章第二節第一項を参照)。

平忠盛の散在所領が、鳥羽院や摂関家周辺の人脈を介して和田荘という領域型荘園、すなわち「荘」として結実したことは、さきに述べた。これに対し、忠盛の弟忠正の散在所領は、忠正が崇徳院に仕え、乱で敗北したことで、ついに政界中枢と結びつくことなく、散在所領のまま没収される。そして、その散在所領は、鎌倉時代にいたり、やはり散在する「村」として史料上に登場する。

専制君主たる鳥羽院の近臣として活躍した兄忠盛と、皇位を逐われた崇徳院に仕えざるをえなかった弟忠正。兄弟の明暗は「荘」と「村」、領域型荘園と散在所領という形態のちがいとなって具現したのである。

平治の乱と鈴鹿関 保元の乱後の後白河院政下、伊勢平氏の平清盛は、院近臣の藤原信西しんせいと連携して急速に地位を上昇させる。それに対し、乱後の処遇に不満を募らせる河内源氏の源義朝や、院近臣の藤原信頼のぶよりのごとく、信西らに反目する勢力もあらわれ、再び軍事衝突の危機が訪れる。その背後には、後白河院政の停止と二条天皇による親政実現を目論む勢力の動きもあつた。

平治元年（一一五九）十二月九日の深夜、平清盛が熊野詣に出向いている隙をついて、藤原信頼・源義朝軍が後白河院の御所を襲撃し、後白河と二条天皇を内裏へ幽閉する。これをうけ、藤原信西は山城国宇治田原やましらのくにうじたわら（京都府綴喜郡宇治田原町）へ脱出するも、自害する。結果、藤原信頼が政権を握り、後白河院政を停止。二条天皇の親政へと移行する。

これを聞きつけ、畿内の軍勢を整えながら帰京した平清盛は、二十五日早朝、自身の名前を記した名簿みょうぶを藤原信頼へ提出。これは臣従儀礼、すなわち降伏を意味する。とはいえ、その裏で清盛は二条親政派と連携し、天皇の救出に成功。やがて後白河も脱出し、官軍と賊軍の逆転がおこる。そして、二十六日の合戦を経て、藤原信頼は捕縛・処刑。源義朝は東国へ逃亡するも、尾張国野間内海荘おわりのくにのまうつみのしやう（愛知県知多郡南知多町野間）で殺される。

なお、義朝の嫡男、のちに鎌倉幕府を開く源頼朝よりとともが伊吹山（滋賀県米原市伊吹町）付近で捕まり、伊豆国（静岡県）へ流罪になるのは、このときのことである。合戦後、平清盛方は、保元の乱の際と同様、鈴鹿関と不破関を固めていた（史366）。頼朝が伊吹山で捕まったのは、封鎖された不破関をさけて山奥から東下を試みたものの、大雪のなか、義朝らとはぐれたためである。

結果、暗躍した二条親政派は失脚し、平重盛が伊予守よのかみ、宗盛が遠江守とおとうみのかみ、頼盛が尾張守おわりのかみ、教盛が越中守えつちゅうのかみ、経盛が伊賀守いがのかみに任命されるなど、以後、平氏一門は、急速に政治的地位を上昇させていくのである。

伊勢平氏の郎党伊藤氏 保元・平治の乱を通じて活躍する伊勢平氏の有力な家人に、伊藤氏いとう一族がいる。伊藤の名字は、曩祖藤原基景もとかけが伊勢守に任じた事蹟による（史411・412）。万寿五年（一〇二八）五月の史料にみえる平維衡の郎党「伊藤掾いとうのじょう」以来、伊藤氏は、伊勢平氏の郎党のなかで、もつとも古くからみえる家人である（『小右記』同月十九日条。図58）。

江戸時代に編纂へんさんされた地誌『三国地志』は、伊藤氏を鈴鹿郡の住人と記している。同じく平氏の郎党として活躍した白子党しろことうも、鈴鹿郡に南接する奄芸郡あんきぐん白子（鈴鹿市白子町）を本貫とした。伊藤氏は、亀山市域一帯を拠点としていた可能性がある（ただし『保元物語』は伊藤氏を古市（津市白山町古市か）の住人と記すなど、異説もある）。

保元の乱には、平清盛の郎党伊藤景綱かげつなと子息忠清ただきよ・忠直ただなおが参加しており、忠直は、強弓で著名な源為朝に射殺されている。景綱は「鈴香山【鹿】の強盗の張本小野七郎」を生け捕ったことがあるといい、鈴鹿山周辺でも活躍した（『保元物語』）。そして、平治の乱で景綱は、熊野詣から帰洛する平清盛を摂津国阿倍野（大阪市阿倍野区）で出迎え、内裏から脱出する二条天皇を護衛し、勝敗を決した六波羅合戦では源義朝軍と戦っている（『平治物語』）。

以後、伊藤氏は、平家一門の有力な侍大将として活躍する。

次節でも、たびたび登場することになるだろう。

図58 伊藤氏略系図

